

歴史のやかた

置戸町

郷土資料館

農業

北海道の山間部は輸送手段の発達とともに開かれていきました。置戸の農業の歴史は浅い方ですが、人跡未踏の大樹海を開墾することが容易でなかったことは残された数々の用具からも見て取れます。野付牛屯田の分家、あるいは、秋田、青森、広島等からの団体移民によって、置戸の開墾が始まりました。収集した農機具や生活用具等の開拓関係資料の中には本州から持参したものもあり、また創意工夫して立派にその役目を果たした道具もあります。



置戸町郷土資料館の前身は、昭和45年に町立図書館の一部に設けられた郷土資料室。その後、旧中央公民館を改築して昭和63年に現在の郷土資料館が誕生しました。展示・収蔵されている資料は、主に町郷土史研究会員の手によって収集されたもので、現在その数はおよそ1万点にも及びます。

郷土資料館には、旧石器時代のものから、最近まで使用されてきた生活用具や産業機具などが展示されており、その一つひとつに歴史が刻まれています。

先人たちの生活に思いをはせながら、歴史の息吹を感じてみませんか。



林業で栄えたまちを物語るように、郷土資料館に展示・収蔵されている林業関連資料はその数において道内屈指と言えます。それは時代の流れで機械化が進む中、全てを人力に頼って使用されていた時代の道具が捨てられ失われていくことを危ぶみ、収集に奔走した結果得られたものです。丸太を転がすトビにも色々な工夫がほどこされ、ドットコ、キリン、ガント、上曳に用いたタマ、下曳のソリなど、今では想像もつかない使い道の道具もあります。

林業